

「話す」と「書く」に見られる
バリエーションには何が
起因しているのか？
—ストーリー描写課題の結末部に着目して—

奥野由紀子 （首都大学東京）

I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス



本発表の目的

- I-JASに含まれる、絵を見せて行うストーリー描写課題の「話す」「書く」データを比較した研究例の紹介。
- ストーリーの結末部の言語形式に着目し、母語ごと、個人内の傾向を探索的に分析。
- 作業課題による違いに見られるバリエーション「中間言語変異性」について考察。

第二言語習得過程における中間言語変異性

- 第二言語習得過程において、変異性 (variability) は、中間言語の特徴のひとつ。
- 作業課題による中間言語の変異性 (Dickerson 1975, Schmidt 1980, Tarron 1985, Ellis 1987, Yuan and Ellis 2003 など)

「話す」VS「書く」比較研究

・日本人英語学習者コーパスの比較（JLEコーパス VS JEFLコーパス）

書きことばと話しことばを特徴づける文法項目を抽出（小林2008）

👉 異なる学習者集団・異なるタスクデータの比較

⇒同一のタスクで同一被験者の行う言語使用データを採取する必要がある（投野2008）

⇒I-JASでは同一被験者内での比較可能!

作業課題による中間言語変異性

Tarone(1983):中間言語の作業課題による共時的な変異の原因は、**注意量の差**であると主張。



中間言語変異性の説明理論として

Bialystok & Sharwood Smith(1985)

- ・言語知識レベル（宣言的知識）
- ・言語処理レベル（手続き的知識）

Cf. 大神(2000)、奥野(2003)

+

- ・メタ言語的知識（山岡1989, 山岡1997）

→ Cf. 中窪2012

情報処理理論→タスクプランニング研究

人の認知能力には限りがあり、処理すべき情報の全てに注意を向けることはできない。

↓

プランニングの機会を与えることで認知的負担を減らし、注意を向け、より質の高い産出ができるようになるのではないか。

（Ellis2005,Ortega1999,Yuan&Ellis2003）

プランニングと フォーカス オン フォーム

- ・プランニングとFonFとの関わり
(Sangarun2005など)

→内容>語彙>文法

発話の質：プランニング有> 無

- ・中窪 (2012)：発話思考法によりプランニングとFonFとの関わりを分析。

⇒ストーリー描写課題にはメタ言語的知識が作用

本研究の目的

作業課題の違いにみられる中間言語変異性にはどのような知識が働いているかを、同一被調査内の分析が可能なI-JASのストーリー描写タスク「話す」「書く」の比較から検討する。

I-JAS ストーリー描写課題の特徴

「話す」課題（**S課題**）：ストーリーを話す
絵を受け取って理解したら、すぐタスクを始める（約30秒～1分後）。

「書く」課題（**W課題**）：ストーリーを書く
（入力）話す課題としてリハーサル済み。
10～15分。準備、見直し可能。

使用データ

【I-JASの一部】

- ・インドネシア語（尼）、中国語（中）、英語（英）、ドイツ語（独）、タイ語（泰）、
15名ずつ計75名
- ・海外の大学での日本語学習者（JFL）
- ・日本語能力テスト(J-cat及びSPOT90)により、日本語能力の差が出ないよう各15名を抽出。

+日本語母語話者15名

表1 各国の日本語能力テスト平均値
(有意差なし)

	尼	中	英	独	泰
J-CAT	207	213	212	213	211
SPOT	67	69	68	68	68

⇒日本語能力試験レベル2に届くレベル

調査手順

- ① 5コマ漫画を提示
- ② 「話す」課題としてのストーリーテリング
- ③ 対面インタビュー（今回は分析の対象外）
を30分程度
- ④ 再度同じ絵を見て、「書く」課題としてパソコンでストーリーを入力。

ストーリーテリング（1）
「ピクニック」
登場人物（ケン・マリ・犬）

【スピーキング】

5枚の絵を見て
ストーリーを話す。
(理解した後、すぐ発話)

【ライティング】

5枚の絵を見て
ストーリーを書く。
(10～15分で作成)



分析手順

ストーリー描写課題の結末部を対象として

分析1：出現した言語形式パターンに着目し、S課題W課題、母語ごとに集計。

分析2：日本語母語話者の傾向を分析。

分析3：日本語学習者の個人内のS課題→W課題
の複雑さと正確さの傾向を分析しパターン
を抽出。

分析1：出現した言語形式の4大パターン

- ① 「食べられてしまいました・食べられてしまった」
「受身+しまった」を使うパターン
- ② 「食べられました・食べられました・食べられた」
受身を使用するパターン
- ③ 「食べてしまいました・食べてしまった」
「能動態 +てしまう」を使うパターン
- ④ 「食べました・食べた」
能動態過去を使用するパターン

表2 母語別および課題別の言語形式数
(15名中)

	尼 S	尼 W	中 S	中 W	英 S	英 W	独 S	独 W	泰 S	泰 W
① 食べられて しまった	3	4	1	0	1	4	2	3	2	7
② 食べられた	1	3	6	9	1	0	1	1	3	1
③ 食べてしまっ た	6	6	1	2	7	6	6	7	5	6
④ 食べた	0	0	2	0	3	2	4	3	4	1

表3 言語形式ごとの課題による差の傾向
(5カ国語中の数)

	S<W	S=W	S>W
① 食べられてしまった	4	0	1
② 食べられた	2	1	2
③ 食べてしまった	3	1	1
④ 食べた	0	1	4

→複雑な形式「食べられてしまった」が書くタスクでは多くなり、単純な形式「食べた」が書くタスクでは少なくなる傾向にある

分析1 でわかったこと。

母語にかかわらず、より複雑な言語形式が書く課題に多く現れ、より単純な形式が話す課題に多く現れる傾向。

分析2 表4-1 I-JAS 日本語母語話者の結果

JN	S課題	W課題
1	サンドイッチを、 食べてしま、つ、食べて、えしまった のです	食べ物はすべて犬に 食べられていて 、二人は困ってしまいました。
2	バスケットの中に入っている食べ物を犬が 食べてしまいました	犬にサンドイッチを 食べられていて 、ケンとマリは屋食を食べることが出来ませんでした
3	そしてバスケットの中を見ると先ほど作ったはずのサンドイッチ(サンドイッチ)や、果物食べ物が全部 食べられてしまってます	そしてバスケットには無残に 食い散らかされたサンドイッチや果物がありました 。二人ともがっかりした様子です。
4	「えー」慌ててかごーをの中を見るとサンドイッチもリンゴも全部犬に 食べられていました	「おーい、サンドイッチも林檎も 全部食べられてちゃたよ 。」とケン。「お屋どうしましょう。」と困った顔のマリ。満足な顔しているのは犬だけでした。
5	マリとケンが、バスケットの中を見ると、中の食べ物が全て 食べられてしまいま、食べられていました	バスケットの中をのぞくと、食べ物はすべて犬に 食べられていました
6	バスケットの中を見るとえー作ったサンドイッチは全部 食べられてしましました	ケンとマリがバスケットをのぞいたところ、せっかく作ったサンドイッチが全部犬に 食べられていました 。
7	作ったサンドイッチは、 食べられていました	バスケットの中を見るとサンドイッチやリンゴは はかじられていました

分析2 表4-2 I-JAS 日本語母語話者の結果

JN	S課題	W課題
8	作ったサンドイッチやりんご、が、と犬に 食べられてしましました	中に入っていたサンドイッチやリンゴを犬に 食べられてしまつて 、ケンとマリはとてもがっかりしました。
9	作ったサンドイッチをみんな 食べられてしまつて あー残念、ということになりました	食事をしようとバスケットを開けると、犬が出てきて、サンドイッチを 食べられてしましました 。二人で残念がりました。
10	ケンと、マリは、大事な、お弁当を、 食べられ、散々な、ピクニック になってしまいました	しかも中のサンドイッチや果物も 食べてしまつていました 。二人にとって散々なピクニックになりました。
11	屋食が、えー犬に 食べられてしまつた ので、ケンとマリはとてもがっかりしました	犬はバスケットに入っている間にサンドイッチやリンゴを 食べ散らかしていた ので、ケンとマリはがっかりしました。
12	サンドイッチは飼い犬のドック(ドッグ)に犬に 食べられてしましました	バスケットの中身を全て 食べられてしましました 。
13	つくらさ、作ったサンドイッチは犬に 食べられてなくなつてしましました	残念、サンドイッチは犬に全部 食べられてしましました
14	犬に、 全部かじられて 、自分たちの食べる物は、何(なに)にもありませんでした	丹精込めてつくったサンドイッチがほとんど愛犬に 食い散らかされてしましました
15	二人で作ったお弁当はすっかり、 食べられてしまつてしましました	なんと、犬はバスケットの中のお弁当をすっかり 食べてしまつてしましました

表5 日本語母語話者が用いた言語形式

	S課題	W課題	S<W
①食べられてしまつていた	2	0	
②食べられてしまった	6	2	
③食べられていた	3	5	●
④食べられた	2	0	
⑤食べてしまつていた	0	2	●
⑥食べてしまった	2	1	

- ・学習者には出現していなかった「**テイタ**」の使用が多い。
- ・「食べた」「食べました」の使用はない
- ・その他： 食べちらかしていた・食い散らかされていた

→日本語母語話者テイルの使用15名中

S課題 5例(33%) W課題 9例(60%)

分析2でわかったこと

- ・母語話者は結末部に「シマッタ」「テイタ」を用いてストーリーを完結しようとする。
(両形式使用は80%)
- ・母語話者は、「食べました」は使用しない。
- ・「食べられてしまつていた」部の言語形式がより複雑になるとは言えない。

⇒母語話者の文法的な言語知識については作業課題による影響は少ない

分析3:個人内のタスクによる違い(S→W)

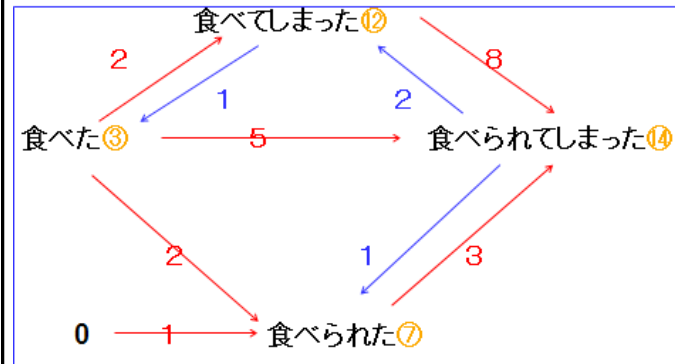


表6 S食べてしまった→W食べられてしまった

	S課題	W課題
尼29	バスケットの中に食べ物を全部食べてしまいました	食べ物は全部犬に食べられてしまいました
泰27	バスケットに入ったサンドイッチや果物、は犬を食べてしまいました	バスケットの中に入れたサンドイッチやリンゴは犬に食べられてしまいました
英37	犬に、もう、食べられちゃ、食べてしまいました	たべものを犬に食べられてしまいました

表7 S食べた→W食べられてしまった

	S課題	W課題
尼46	サンドイッチがもう食べました、バラバラになりました、から、残念した	サンドイッチがもう食べられてしまいました
泰19	バスケットの中に見て、犬はサンドイッチを全部食べました	バスケットの中に見て、作ったサンドイッチが全部食べられてしまいました
泰42	バスケットの中に、はい、はいった食べ物が犬が食べました	バスケットの中にあるサンドイッチをチェックすると、やはりラッキーが食べられてしまいました

表8 S食べられた→W食べられてしまった

	S課題	W課題
泰18	サンドイッチを食べて、犬に、食べて、食べられました	サンドイッチが犬に食べられてしまいました
泰41	サンドイッチとリンゴが食べられました	バスケットの中をみて、サンドイッチが食べられたしまったことが分かって、残念でした
英36	バスケットの中の食べ物がぜんぶ、いぬ、犬に食べられて、気づいていました	食べ物は全部犬に食べられてしまっ、大変でした

表9 S食べられてしまった→W食べてしまった

	S課題	W課題
泰22	リンゴとサンドイッチは食 べられてしまいました	犬はサンドイッチとリンゴを たべてしまいました
尼15	バスケットの中にある食 べ物は犬さんが、食べら れてしまいました	犬は全部食べ物を食べて しまいました

分析3からわかったこと

- ・S課題→W課題で変化がないパターンが半数。
- ・S課題→W課題への変化パターンは学習者に
より様々なバリエーションがある。
- ・単純→複雑になるパターンが多い。
- ・後続形式が複雑になることにより正確さが
落ちて誤用となる場合もある。
- ・複雑→単純な形式になる場合もある。

⇒ 「正確さ」を加えた分析へ

個人内における「言語形式の複雑さ」と
「正確さ」

表10 S課題からW課題への正確さ及び複雑さによる変化パターン

正確さ 複雑さ	正 確 → 正 確	正 確 → 不正 確	不正 確 → 正 確	不正 確 → 不正 確
複雑さ変化なし	変無正正	変無正不	変無不正	変無不不
単純→複雑	単複正正	単複正不	単複不正	単複不不
複雑→単純	複単正正	複単正不	複単不正	複単不不

表11 S課題からW課題への変化パターン例

正確さ 複雑さ	被調査者	S課題	W課題
変無正正	英03	犬はサンドイッチと食べ物を食べてしまった	犬がサンドイッチを食べてしまった
変無正不	尼26	サンドイッチを食べられてしまいました	二人の食べ物が食べられてしましました
変無不正	泰16	犬にせんぶ、食べら、食べらり、ま、食べらりました	朝の作ったサンドイッチを全部食べられました
変無不不	中42	準備した食事は、あー、全部こわーしてしまった。	準備したの食事は全部こわしてしまった
単複正正	中23	その犬は食べ物一を食べて、その外に飛び出した	その食品も犬に食べられました。
単複正不	独16	犬もゆっくり屋ごはんを食べました	3人と犬はゆっくり屋ごはんを食べたしました
単複不正	尼20	サンドイッチとりんごが、もう食べてしまいました	ケンとマリが作った食べ物は犬に食べられました
単複不不	中49	その犬がえと、食べ物が全部食べました	食べ物は全部犬に食べてしまいました
複単正正	泰22	リンゴとサンドイッチは食べられてしまいました	犬はサンドイッチとリンゴをたべてしまいました
複単正不	尼06	食べ物はなくなっていました	全部の食べ物はもう食べてしました。
複単不正	尼15	食べ物は犬さんが、食べられてしまいました	犬は全部食べ物を食べてしまいました
複単不不	独27	犬が入ったまま、サンドイッチとか林檎とかを食べたら残念です	犬を体分に食べたリンゴとサンドイッチを見ます

表 1 2 変化パターン別出現数(全75例)

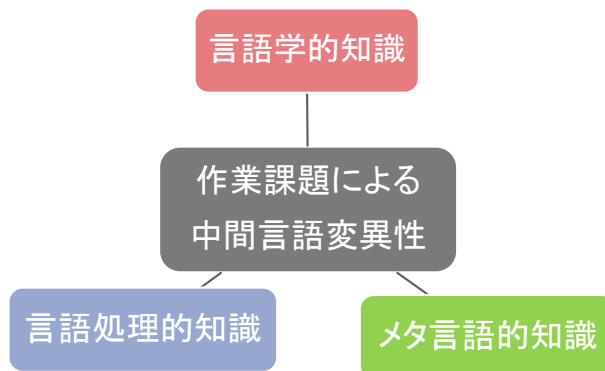
	変無 正正	変無 正不	変無 不正	変無 不不	単複 正正	単複 正不	単複 不正	単複 不不	複単 正正	複単 正不	複単 不正	複単 不不
尼	2	1	1	1	2	1	4	0	1	1	1	0
中	6	0	0	2	1	0	2	3	1	0	0	0
英	5	0	1	2	4	0	2	0	0	0	0	1
独	8	0	0	0	0	2	1	1	1	0	0	2
泰	4	0	1	0	3	1	3	1	1	0	1	0
合計 (%)	25 (33)	1 (1)	3 (4)	5 (7)	10 (13)	4 (5)	12 (16)	5 (7)	4 (5)	1 (1)	2 (3)	3 (4)
34 (45%)				31 (41%)				10 (7.5%)				

結果のまとめ

・課題による正確さと複雑さの組み合わせから、変異性には様々なパターンがあることが明らかとなった。

・それぞれのパターン例を観察することにより、変異性の要因には、各学習者の知識レベルと処理レベルそして処理過程におけるメタ言語的な知識が複雑に関与していることが伺えた。

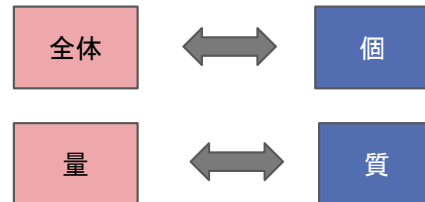
「話す」と「書く」に見られる
バリエーションには何が起因しているのか？



I-JASストーリー描写課題の分析するには

各課題がどのような知識を測っているのかを知り、作業課題の違いには学習者の異なる知識レベルが作用していることを認識して分析する必要がある。

多角的に分析することの重要性



参考文献

- Bialystok, E. & M. Sharwood Smith. 1985. Interlanguage is not a state of mind: An evaluation of the construct for second-language acquisition, *Applied Linguistics* 6:101-117.
- Dickerson, L. 1975. The learner's interlanguage as a system of variable rules. *TESOL Quarterly* 9: 401-407.
- Ellis, R. 1985. *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. 1987. Interlanguage variability in narrative discourse: Style shifting in the use of the past tense, *Studies in Second Language Acquisition* 9, 12-20.
- Ellis, R. 2005. Planning and task-based performance: Theory and research. In R. Ellis (Ed.), *Planning and task performance in a second language*, pp. 3-34. Philadelphia: John Benjamins.
- Ortega, L. 1999. Planning and focus on form in L2 oral performance. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 109-148.
- Ortega, L. 2005. What do learners plan? Learner-driven attention to form during pre-task planning. In R. Ellis (Ed.), *Planning and task performance in a second language*, pp. 77-109. Philadelphia: John Benjamins.
- Sangarun, J. 2005. The effects of focusing on meaning and form in strategic planning. In R. Ellis (Ed.), *Planning and task performance in a second language*, pp. 3-34. Philadelphia: John Benjamins.
- Schmidt, M. 1980. Coordinate structures and language universals in interlanguage. *Language Learning* 30:397-416.
- Tarone, E. 1983. On the variability of interlanguage systems, *Applied Linguistics* 4:143-163.
- Yuan, F., and Ellis, R. 2003. The effect of pre-task planning and on-line planning on fluency, complexity and accuracy in L2 monologic oral production. *Applied Linguistics* 24:1-27.

参考文献

- 大神智春(1999)「タスク形式の違いによる中間言語の可変性」『第二言語としての日本語の習得研究』3号, pp.94-110.
- 奥野由紀子(2005)『第二言語習得過程における言語転移の研究－日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に－』風間書房
- 奥野由紀子(2015)「『話す』課題と『書く』課題に見られる中間言語変異性－ストーリー描写課題における『食べられてしまった』部を対象に－」国立国語研究所論集9号, pp.121-134.
- 小林雄二郎(2008)「高頻度語を用いた学習者コーパスの分類」『学習者コーパスの解析に基づく客観的作文評価指標の検討』統計数理研究所 pp.69-82.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016)「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』Vol.6 No.3, 国立国語研究所 pp.93-110.
- 投野由紀夫(2008)「NICT JLE VS. JWFL: n-gramを用いた語彙・品詞使用の発達」『英語コーパス研究』第15号, pp.119-133.
- 中窪高子(2012)「日本語学習者のタスク・プランニングの過程－プランニングにおけるフォーカス・オン・フォームの分析－」『第二言語習得研究と言語教育』くろしお出版 pp.109-130.
- 野村真理子(2010)「日本人英語学習者のスピーキングvs.ライティングパフォーマンスの比較分析のための指標－学習者コーパスに基づくアプローチ－」STEP BULLETIN vol.22.日本英語検定協会 pp.30-46.
- 山岡俊比古(1989)「教室における学習者の中間言語の変異性－要因分析－」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.19, pp.205-215.
- 山岡俊比古(1997)『第二言語習得研究』桐原ユ二.

ご清聴ありがとうございました



奥野由紀子 yukokuno@tmu.ac.jp